

今回、シャルル・トレネの「幽霊」を訳してみたが、そこでまた改めて気付いたことがある。それはこの歌も公表されている歌詞と、歌っている歌詞とで違うところがあるという点だ。ただ一点の言葉を変えるだけなのに内容には大きな変化が出てくる。その表現の奥に潜んだ意味に気付いたとき愕然とする。しかし「それを言っちゃあおしまいよ」である。そしてシャルル・トレネの歌は歌っている通りに訳すとまずい歌もある。いや、これはトレネの歌ばかりではない。チクリとした政治批判の刺を織り込んだ言葉の絨毯は、シンガーソングライターならではの所業だ。しかし、公表された無難な歌詞に従うのも寂しい。そして世に広く永く残すためには、その無難な歌詞が必要なのだ。分る人にだけわかればよい。それは社会派文学者に共通する。

そして言葉を「歌い替える」ということを考える。自分で作った詩で、公表後に「もっと適切な言葉を見出した」ということは「詩人」としては考えにくい。だから歌っている言葉の方が本当に言いたかったことではないかと思う。

さて、それは心の奥に悶々としまっておくことにして、「幽霊(Le revenant)」の歌詞の、必要以上に踏み込まない表現の重なりを見てみようと思う。

まず「Un cri dans la nuit d'hiver, Ma fenêtre est de travers」「冬の夜にきしむ音、我が窓は歪んでいる」を別訳すると、「老人の悲痛な叫び声、我が心の窓は不調だ」という光景になるかと思う。それはストレスを抱えた状態ではなからうか。

そして幻に見るのは「Une grand-mère Blanche de Castille」だ。何故ここでブランシュ・ド・カスティユなのか。

アルフォンソ 8 世の三女としてスペインのバレンシアで生まれた彼女は、ルイ 8 世の妻として迎えられた。夫の生存中から政治に介入し、12 歳で即位した息子・ルイ 9 世の摂政となり孤軍奮闘した。敵を味方につけたり追い払ったりする手腕もあり、その強い性格は一生にわたって穏やかな息子に影響を及ぼした。息子も母に頼り切り。そういう勇ましい女性である。彼女との恋のためにルイ 8 世を毒殺したのではないかという説もあるティボー 4 世との仲は不明だが、恋よりも政治に生きた女性だろうと思われる。良くも悪くも現代風に言えば仕事の鬼かもしれない。そういう人にトレネは「このままじゃ死んじゃうよ」というほどスケジュールを詰め込まれたのだろう。

そしてハード・スケジュールの果てに倒れると「本当のトマト・ファルシのように (Comme une vraie tomate farcie)」「蓋をされた亡骸 (La poussière qui le recouvre)」この表現も面白い。トマト・ファルシとはトマトの肉（あるいは野菜）詰め。トマトの上の部分帽子のように蓋状に切り取っておき、中身をくり抜く。くり抜いたトマト、肉や野菜に香辛料を加えて混ぜる。それを団子状にして詰めた後で、先に切り取ったトマトの帽子で蓋をする。そのあとオーヴンで 15～20 分くらい焼く。トマトの中身は肉や野菜で満杯。トレネの予定表は約束で満杯。中身を詰め込まれて焼かれたトマトの外皮はシワシワ。トレネも疲れてシワシワ。棺桶には蓋がされ、トレネの頭には帽子が乗る。

そこで歌詞の最後。約束したのは覚えているけれど、明日からの約束は果たせないよ。何せ過労で倒れて幽霊になってしまったからね。そして光景は歌詞の最初へ戻る。

「Je la ferme de mon mieux 」最善を尽くして（人生の窓を）閉じる。(2015.1.10)